

釣れ釣れなるままに

2013年思い出の釣行記 PART. 12

## 鹿島釣狂



どうです。この圧倒的な面構え

## エリモ港

9月22日(日)、平成25年度第5回大会が冬島港～東洋港で開催された。台風18号が通り過ぎて温かかった海を幾分かき混ぜてはあったが、まだまだ暑い夏の様相を残したエリモ周辺であった。1週間前のこの付近で大会を開いた釣り会の成績は1匹身長5匹重量制で500点台の低い記録が記されてあった。

今回の大会はアカハラの確保が必要になるだろうと、ゴロを早めに溶かすために、大会2日前に釣り具店へ立ち寄った。しかし、求めるゴロのMサイズが置いていない。仕入れ先にも確かめてもらったところ今年のイカは不漁で入荷がないとのことだった。仕方なくLサイズ30本、Sサイズ40本を購入した。Lサイズの方はアカハラ釣り用にと冷蔵庫に入れずに溶かしておいた。

本日の釣りバスは、宴会用座席にカラオケ付きの大型バスが用意されてあった。さすがにカラオケを楽しむ会員はいなかったが、後ろのゆとりのある宴会席に陣取った仲間は早速、釣り談義に花を咲かせていた。当日は、5時満潮の逆潮で、エリモの出岬に乗っての釣りは出来ないのが残念だったが、晴天で風もなく適度なカジカ波が打ち寄せて絶好の釣り日和となった。

私は、当初の予定通りエリモ港で下りた。港内で嫁となるはずのアカハラを取ってから、婿になるはずのアブラコやカジカを狙って夕日ヶ丘、日勝大和方面の舟揚場を点々と釣り歩く算段でいたのだ。その思いは嵐氏も同じで港内で一緒に並んで釣りをすることになった。嵐氏と一緒にだとすると、魚は彼の方へと吸い寄せられていくような気もするが、同じ狙いであったことに心強いような気もする。

今回は、磯でのアカハラではなく港内のアカハラなので、仕掛けに6号鉛を2つにした軽い天秤を自作して用意していった。早めに溶かしておいたゴロも提灯になる一步手前のいい具合に仕上がっていた。そのゴロを打ち始めてすぐにアカハラのアタリが出て、30cm～35cmほどのものがバタバタと釣れ続いた。万が一のためにとタカノハを狙って遠投していた竿からは一度の音沙汰もなかった。

## 夕日ヶ丘から日勝大和へ

こんなもんだらうと当初の予定通り、国道を通過して夕日ヶ丘へと向かった。しかし、少し前に出発した嵐氏が見あたらない。夕日ヶ丘のバス停から磯に下りていくと嵐氏と出会った。彼は港内にある道を通って各舟揚場に様子を見ながらこちらに向かってきていたのだ。この付近に下りているはずの佐々木氏を捜すと、彼は今日の狙いとしていた舟揚場でやっていた。夕日ヶ丘は佐々木氏の得意とする釣り場である。1回目はタカノハやクロガシラ、2回目はカジカやアブラコを大釣りしてきたのだ。今日も既にアブラコやカジカの大き物を揃えていた。

嵐氏と共にこれからの釣りについて算段をする。どの舟揚場にもその入口には鉄製の横下駄が高く張り巡らされあつて舟揚場には下りていくことが出来なくなっていた。その高

なくなった入口には漁師が利用していると思われる梯子が立てかけてあった。その梯子を拝借して一旦防潮堤に上がり、舟揚場に下りる時にもその梯子を利用させてもらうということで、嵐氏はその舟揚場で竿を出した。私は、そこから夕日ヶ丘方向に戻った舟揚場でやることにした。30cmほどのハゴトコが竿を揺らしたが、これが嫁になってしまうのだろうか。そこに竿尻を持ち上げるあたりが出て中型のカジカが来た。

その後は時たまハゴトコが竿を揺らすだけで大物の感触はないので、何度か嵐氏と佐々木氏の釣りを見学に行く。嵐氏は若い漁師に舟揚場を追い出されてしまっていた。理由もなくここで釣りをするなというのだそうだ。争っていてもしょうがないので嵐氏は更にもう右の方の舟揚場に移っていった。

私は、日勝大和に向かった。堀内氏がいつも大物のアブラコをあげてくるところだ。堀内氏が防潮堤の上で竿を出しながら温かく迎えてくれた。防潮堤の下には、先日からの変化で打ち上がったゴミが積み重なって大岩のような固まりになっていた。暗い内に道糸にまとわりつくゴミと戦いながら何とか4本のアカハラがきたが、明るくなってからはハゴトコさえ釣れないとぼやいていた。

私は堀内氏の右に左へと何度も磯の様子を見てから、防潮堤についた鉄製の梯子を下りて小川の横に砂利が打ち上がっているところで竿を出した。波間に青草や昆布が揺らめいていかにも大物が潜んでいそうに見えた。しかし、そこで竿を揺らしたのはハゴトコばかりで、唯一タカノハが来たがそれも35cmには届いていなかった。



本日の私の釣果

## 歌露に軍配

### 審査結果

優勝	岡 英成	1629点 (カジカ 483mm+アブラコ430mm+7160g)	歌 露
準優勝	吉井 博	1253点 (アブラコ448mm+カジカ 365mm+4400g)	歌 露
3位	前野達志	1229点 (カジカ 445mm+アカハラ340mm+4440g)	歌 露
4位	嵐 光博	1088点 (カジカ 417mm+アカハラ346mm+3250g)	エリモ港
5位	鹿島釣狂	1014点 (カジカ 370mm+アカハラ360mm+2840g)	エリモ港
身長優勝	佐々木 清	1246点 (アブラコ469mm+カジカ 415mm+3620g)	夕日ヶ丘



左から身長優勝佐々木氏、重量優勝岡氏、準優勝吉井氏、3位前野氏

会員は、琴似、夕日ヶ丘周辺、歌露に別れて釣り場を選定した。会長は当初から歌露に入る予定でいたが、岡、吉井氏が「俺も連れて行ってくれ」というので、例のごとくとおきの穴場を紹介してしまった。暗い内に前野氏から電話をいただいていた時には、カジカの45cmを初めとして8本ほどを手にしており、他の2人も大物カジカにアカハラを嫁として確保して、明けてからのアブラコで優勝争いをするつもりのものであった。やはりここで力を発揮したのは遠投力に勝る岡氏であった。大物カジカ、アブラコを沖の昆布根から引きずり出したのである。岡氏は今回の釣りではアカハラも対象魚に加えて、食い込みのよい25号竿を用意していたが、遠投にも魚を取り込む際にも問題なかったようで、彼の技術の高さを裏付けすることとなった。それでもって吉井氏のアブラコが寸足らずで準優勝、前野氏はとうとうアブラコが釣れず終いで3位という成績になった。しかし、3

人ともこの時期としては最高の釣りを見せてくれた。特に岡氏は釣遊会歴代高得点第5傑にくい込む奮闘ぶりだった。

身長優勝は、前回に引き続き佐々木氏であった。彼が得意とする夕日ヶ丘でタカノハやクロガシラを狙っての釣りだったが、私や嵐氏がエリモ港でチビアカハラを釣って駆けつけたときには、身長賞に輝くアブラコと良形カジカを釣り上げてしまっており余裕の釣りとなった。

### とんとん会第3回大会

今回は「とんとん会」にお世話になり目黒境浜のタカノハを狙って参加した。職場からの帰り際に同僚から「釣りに行くんですか」と尋ねられた。私のソワソワとした行動から心の内を見透かされていたのだ。午後8時出発の時刻にまだ余裕があるのでイソメを購入した。昨日の釣り新聞にタカノハにはサンマとイソメの合い掛けに来たという記事が載っていたからだ。ついでにサンマも4本買った。いつもは安売りの冷凍サンマしか使わないのだが今日に限って刺身にでも出来そうなピカピカのサンマだった。そのうちの1本は釣リエサに、残った3本は今日の晩ご飯にでも焼いてもらおうと考えたのだ。しかし、こんな時に限って女房が早々と晩飯を用意してしまっており、しかもサンマの塩焼きがテーブルに並べられていた。そして私が買っていった生サンマをみて「いいサンマですね」ときたもんだ。私もつい「釣リエサ用のサンマだから」と口走ってしまった。釣遊会の大会では午後5時半からの「ザ・フィッシング」を見ながら飯を掻っ込み慌ただしく出て行くものだから、それに合わせて支度をしていたのだ。飯を食ってしまうとすることもなく、1時間も前に集合場所に着いてしまった。

バスに乗り込むと、例のごとくH宴会部長が、最近仕留めたばかりの熊の唐揚げをごちそうしてくれた。今年は山のドングリが不作で、熊が街に出没しているので猟友会の依頼で出動したというのだ。鹿やダチョウも出てきたが、私は噛めば噛むほど旨味が滲み出てくる熊のシコシコ感に呻き声を上げそうになった。

本日は晴天で波が1.5mと予報されていた。バスから覗いた日高方面の波は全く穏やかで、襟裳岬を交わしてから砂場でもやれろと判断した。会員達は20号台風の余波を受けてうねりが残っていると考え全員が漁港に下り立っていった。私は、庶野周辺での波も確かめず、当初の予定どおり境浜で下りた。釣遊会に入りたての頃、この砂浜に入って、タカノハを釣ったことがあったのだ。砂浜に立ってみると全く打てそうな雰囲気ではない。高波がゴーゴーと音を立てて打ち寄せてきていたのだ。底荒れもひどい様だ。今日はカジカやアブラコ狙いではなく、あくまでもタカノハ狙いで、女房にも「今日はタカノハを最低でも4枚は釣ってくるからな」と豪語して出てきていたのだ。サンマのやりとりの中でつい口を滑らせてしまったことを後悔した。この状況ではハゴトコさえ釣るのは無理だろう。

何を言われても聞く耳をもっていない。こうだと決め込んだら融通が利かない。いつも

そうなのだ。それで何度も失敗してきた。それにも関わらず、またもや失態を繰り返してしまったのだ。下りてしまった以上、自分を信じて前に進むしかない。どこか打てるところはないかと徘徊したがこの周辺では無理なようだ。やむなく岬トンネルの裏についた舟揚場で波が収まるまでと竿を出すことにした。小さなアカハラがパタパタときてすぐに4本そろってしまった。しかし、カジカやアブラコは望めそうにもない。



高波が打ち寄せてくるが沖の岩礁で波が崩れてここだけは釣りになった。

#### タカノハ 45 . 2 cm

境浜の磯波が少しは治まったかと空身で足を伸ばしてみたが、うねりが入って釣りをさせてもらえそうにない。その間にいくつもの露頭岩がむき出しになり、幾分波が死んでいそうな所を捜してエサバツカンと竿を担いで平磯でやってみた。

竿を設置し終えたところで、漁師がクレーンを積んだ軽トラで舟揚場にやって来た。舟揚場に置きっぱなしだった荷物が作業の邪魔をしてはいけないと慌てて駆け寄った。漁師は「こんな海の状態で舟を出すなんてキチガイ沙汰だ。好きなだけやっていれ。しかし、何も釣れねえべえ」と釣りのことには全く関心がないようだった。平磯に戻ってみると、設置した全ての仕掛けが根掛かりしていた。もう一度打ってみたがやはり同じように根掛かりしてしまう。仕方なく元いた舟揚場で最後まで粘ることにした。明るくなってもアカハラが邪魔しているようなので、ゴロとコマセネットをはずしてあちらこちらに打ってみた。そんなところへ小さなハゴトコが来て、一応規定の2魚種5匹は揃った。これならア

ブラコだって、カジカだって。



捨てたエサを狙ってカモメが近づいてきた。私が立ち上がっても馬鹿にして逃げようとはしない。とうとうイカゴロの頭を銜えた。帰り際にもカツオを銜えて飛び去った。

カモメが近づいてきてその様子をカメラに収めていると、竿先をグングンと揺らすアタリが出た。カジカだ。慌てて竿を掴んでアワセを入れてからリールを巻くといい引き込みで竿を伸された。磯際まで寄せると何と、タカノハだった。しかも隣の道糸に絡んでいる。魚を付けたまま隣の竿を交わしてその竿の下を潜り抜けた。舟揚場は磯舟を引き上げやすいようにと樹脂製の滑り材（シャロスライダー）が何段にも渡してある。何度かその滑り材に釣り針を引っかけていたこともあり、舟揚場の横に付いた砂浜にずりあげた。そして舟揚場から竿で持ち上げようとしたが重たくて持ち上がらない。うねりを伴った次の大きな波がやって来た。舟揚場から砂浜まで2 m程の高さがあったが、夢中になって飛び下りた。そして波打ち際にいたタカノハを大波が来る前、間一髪のところ舟揚場の上に放り投げた。

審査の結果、音調津に入った堀内氏がタカノハにカジカを揃えて優勝を飾った。私は準優勝だった。女房に4枚と豪語していたタカノハは結局1枚になってしまったが、刺身にしてみると半身でお腹がいっぱいになってしまった。酒の方はいつもの倍になってしまったけれど・・・。



魚拓にして額に納めて飾ってみた



半身を刺身にして食卓に並べる。もちろん私は酒を飲む